北海道の山Ⅱ　2016/9/17/Sat-22/Thu

最果ての百名山・利尻山 1,718.8m
山高きが故に尊からず・礼文岳 489.8m
リゾート地の名峰・後方羊蹄山 1,898m
登りやすい活火山・樽前山 1,021.9m

山の虫クレマントクラブ（略称 YMCC）　川原健一　　同行：川原薫

沓掛コースから見る利尻山（左から北峰、ローソク岩、南峰）

7 月の北海道行に続き、9 月も再び北海道の山行を行った。

9 月 17 日（土）

前回は早い便の関空発だったが、今回は夕刻に新千歳着のゆっくりとした便。レンタカー手続き、千歳イオンでの買い出しを済ませ、稚内へ向けて、留萌を経、一路国道 232 号線（通称オロロン街道）を突っ走る。

利尻山

9 月 18 日（日）晴れ

サロベツ原野の広大さに驚き、20 数基が整然と風車を回す風力発電に関心しながら行くと、大日本海の今日は意外と静かな波の向こうに、利尻山がクッキリと姿を現した。今日は登れるぞ、あの山に。

稚内港の近くの適地にレンタカーを停め、波止沿いにフェリーターミナルへ向かう。波止で釣りをしていた年配者に挨拶をすると「今日は波が静かだ」と返してくれた。

フェリーの客室で睡眠不足を解消したいが、雄大な利尻山が見え始めるとそうもいかない。他の客に交じって甲板からしきりにシャッターを切ることとなった。

利尻島・鴛泊港で下船すると、ザックを背負った若者が近づいてきて、タクシー相乗りを求めてくる。すでに先頭の車と交渉済のようだ。もとより断る理由はない。3 合目でタクシーを降りると、若者はお礼を述べ、さっさと走っていった。

何の変哲もない登山道を登って行くと露岩が現れる。展望が開け、日本海に浮かぶ礼文島始め、180 度の展望が楽しめる。振り返ると、残り 180 度の利尻山（前衛）が大きい。

7 月に斜里岳登山口の望岳荘の四阿で地元登山者達と交流した。その時、彼らが言うには「利尻山は近いうちに山頂を踏めなくなるかもしれない」登山道の崩壊が近年激しいのだと言う。そうと思しき辺り数ケ所を通過しながら頂上に向かう。山頂直下で先ほどの若者が下りてきた。一時間待ちました、と宣う。おお、速いな。若者はすれ違い様、飴チャンを握らせてくれた。タクシーの割り勘を少し多めに負担してもらったお礼のつもりらしい。頂上で渡すつもりで待っていたが、待ちくたびれたようだ。何せ彼は走っている。我々の歩みは決して遅くはなく、むしろ速いほうだが、走り人には敵わない。

利尻山頂には単独行者と二人連れ、我々の計 5 人しかいない。ガスが巻いては晴れていくため、ローソク岩が幻想的に現れては消える。おおむね見える時のほうが多いのはありがたい。見おろすと、谷筋の淡い紅葉の中を鏡のように反射光を煌かせ、沓掛の町を抜け、流れが日本海へ注いでいる。

利尻山頂（北峰）から南峰とローソク岩を望む

二人連れは若く、女性は下りに不安があると言う。急な所はしっかり腰を落として歩きなさい、お尻をついてもいい、彼に助けてもらいながらゆっくり下りたらいい、時間はたっぷりある、、近頃？世話焼きになったような気がする。

彼らは元来た道を引き返すが、我々は違う景色を求め、また今宵のホテルが下山口にあることから沓掛へ向かう。ここは難路となっており、漫画地図（漫画は偉大な文化であり、国土地理院地図との優劣上下を言うのではない。情報量の多さは誰もが認めるところ）では危険マークが付いている。木々のために緩和されているが、岩場もあり、裸地だったら上部は確かに危険なコースだ。ずっと下界が見えていて飽きないが、礼文岩から樹林帯に入り、避難小屋を過ぎると展望は無くなり、道は雨天時の水流で穿たれおり、歩きにくくなる。かつ林道まで遠く、コースタイムに比さず、なかなかタフなコースであった。

下山口から予約していたホテルのバスで移動。この日はホテル・アイランドインリシリに泊まったが、値段の割には豪華な食事と綺麗な建物であり、大いに満足した（お勧めです）。

利尻山北麓キャンプ場（三合目）9:20
13:25 利尻山山頂　14:00
14:55 山眺山　15:05
16:52 沓掛林道終点

礼文岳

9 月 19 日（月）晴れ

礼文岳は日本 300 名山にもカウントされない小さな山である。何の期待もせず、ただ礼文島の真ん中にある一番高い山だから、という理由で山頂を目指した。

ホテルのバスで鴛泊まで送ってもらう。フェリーで礼文島・香深へ向かう。かふかと読む。カフカ、なんとエキゾチックな、哀愁を誘う、日本離れした地名だろう。

この小さな港町から礼文岳登山口バス停までタクシーに乗る。そこから 4 時間で山頂往復できるようだ。登り始めてすぐ、山葡萄が穣っているのですぐさま御裾分けに預かる。礼文島は大型哺乳類がいない、当然羆もいないということで、御裾分けは正しくないか？いや、鼠はいるし、リスもいるかもしれない。樹林帯

は密生ではなく、疎林でもなく、ちょうどいい具合の木々の生え間をあるく。気候が丁度なのか、多くの種類のキノコが出ている。どれもかさが大きく、よく育ってる。やがて山頂や利尻山の展望が開け、雄大な景色が360°広がってくる。僅か400m前後の標高にも関わらず、本土では2,000m前後からしか見られない這い松が鮮やかな緑を見せてくれる。これらを楽しみながらゆっくりと歩くと、標高490m礼文岳の山頂に着いた。

礼文岳山頂にて

吹く風がさすがに冷たく、汗がすぐに引く。薄い羽毛服を纏い、耐える。北はスコトン岬、西は笹原の向こうに8時間トレッキングコース、南は海を隔てて利尻山。東から全方位に遠くオホーツク海（いや、見える範囲は日本海か！？）。見事な展望である。何百名山でも持ちえない景色だが、特に数えてもらわなくても礼文岳はよいのだ。日本中にそう言う名山がきっとまだゴロゴロ転がっている。とても行き切れるものではない。礼文岳、遠く日本の果ての絶海に浮かぶ島の小さな山、行って損はない山であった。

登山口バス停でバス待ち時間が2時間ほどあった。そこにはバス停と四阿と公衆トイレと自動販売機と港と郵便局と民家と川しかない！。ところがその何もない場所に、私にはとても珍しい風景があった。後から礼文岳を下りてきた夫婦が河口やその周辺の波止を歩き回っている。何事かと尋ねると、ここの小さな内呂川に鮭が回帰してくるのだという。そう言われて観察したが、鮭の姿はない。ただ、白い死骸がひとつ、カラスに啄まれていた。小一時間したころもう一度観察すると、河口近くの海を大きな魚体の群れが回遊するのが見えた。川の上流を見に行くと、数匹づつ群れをなし、背鰭で流れを切りながら、のたうつように遡上する鮭の姿が確認できた。映像で見たことはあるが目の当たりにするのは初めてであり、極めて感動的な風景であった。

この日は香深港の真ん前の宿に素泊まりした。翌日、澄海（すかい）岬、スコトン岬などを巡る観光バスに乗ったが、バスガイドに鮭の遡上のことを話し、客に紹介したらどうだと言うと、興味なさげで摂り合ってくれないのだった。地元の人には珍しくも何ともなく、その観光的価値がわからないのかもしれない。少なくとも猫岩、桃岩よりも私には興味深い景色であった。

礼文岳登山口 10:30
12:00 礼文岳山頂　12:30
14:00 礼文岳登山口

9月20日（火）晴れ

礼文島内の観光後、稚内に戻り、ノシャップ岬を回ってから、7月に悪天で登り損ね、北海道で登り残している最後の百名山・後方羊蹄山を目指し、オロロン街道から200名山・暑寒別岳の麓を通り、真狩村の道の駅・真狩フラワーセンターまで走る。今宵はここで車中泊。歌手・細川たかしの故郷であるここの道の駅は、深夜にトイレに入ってもセンサーが甲高い声の歌を流す。
「北ぁの～酒場通りには～(^^♪」

後方羊蹄山

9月21日（水）晴れ

後方羊蹄山（シリベシヤマ）は好天に恵まれた。登路は幾つかあるが、我々は南側の真狩コースから登る。

白樺や岳樺の木々の葉から零れる陽射しを浴び、一本調子に登り続ける。途中で外国人パーティを追い越す。最近、よく外国人に山で会う。素早い動きの小動物が目の前を走る。縞リスだ。しっかりと姿を見せ、茂みの中に消え去った。登るにつれ、だんだん視界が開け、大展望が目に飛び込んできた。独立峰の醍醐味だ。火口縁に登り詰めると大きな噴火口が現れる。後方羊蹄山は大小二つの火口を持ち、大きい方が父釜、小さい方が母釜と呼ばれている。では子釜はないのか！？9合目の星ヶ池辺りも噴火口か？これが子釜なのかもしれない。父釜の火口底に河口縁から涸沢が流れ、その堆積がまるでハートのようにもミッキーマウスのようにも見えて面白い。火口はそんなに深くないが、大きく雄大だ。

後方羊蹄山の噴火口・父釜（真ん中にミッキーマウスが）

左回りに周遊すると、岩場を経て後方羊蹄山の頂上1,898mに達した。記念撮影し、残りを周回、母釜を経、一周して真狩コースに戻り、下山した。

この日はニセコのリゾートホテルに宿を取り、車中泊はなし。コンパクトカーでの車中泊の連泊はなかなか辛いものがあるので、ゆっくりと身体を休めることができた。

後方羊蹄山登山口　7:00
10:15 火口縁
11:15 後方羊蹄山山頂
14:40 火口縁
14:40 登山口

樽前山

9月22日（木）曇り

今回の北海道行の当初予定は、残りニセコアンヌプリ、イワオヌプリと湖沼群、北海道駒ケ岳と樽前山を登る予定だったが、礼文島に寄り一泊したことと、ニセコの所要時間の読み違えのため時間が足りなくなり、この日は樽前山を登り、帰阪することにする。

7合目登山口に向かうと、林道取り付きの5合目で通行止め。何と7合目駐車場がすでに満杯とのこと。しかし、早くも下山する人の車があり、待つこと10数分、すぐに車を通してくれた。

樽前山は駐車場から山頂が近いこともあるのか、人気の山である。天気は必ずしも良くなく、ガスがあり、強風も吹いているが、老若男女が登っていく、下りてくる。しかし、さすがに火口原の縁の最高峰・東山1,023mまで来る人は、この日は天気の都合で限られ、それらしき恰好をした人達のみが佇んでいた。

強風とガスの中、火口縁を右回りに周回し、樽前山神社奥宮、西山993mを経、広大な火口原の外輪を楽しみ、樽前山の溶岩ドームを見る。白い水蒸気が吹いているのがわかる。932m分岐、風不死岳分岐をへ、支笏湖を見おろしながら歩き、樽前山7合目ヒュッテに帰り着いた。なお、風不死岳分岐から樽前山7合目辺りおよびその周辺は普通に羆が生息しているとのことだったが、気配も見えず仕舞であった。

樽前山登山口 10:00
10:45 樽前山最高峰
11:30 西山
12:50 樽前山登山口

さて、今回で北海道の百名山を登り終えたが、これらに勝るとも劣らない200名山、300名山、カウントされない無名山が残っている。北海道だけでなく、日本各地のこれらの無名山を登り尽くすことはできないが、「山高きが故に尊からず」を改めて実感した礼文岳はもう一度訪れたい山である。

END